

長谷部 陽子 さん

秋田市新屋ガラス工房

秋田市新屋表町5-2
TEL.018-853-4201
https://araya-glass.akita.jp

●作品は、秋田市新屋ガラス工房に
常設展示・販売



秋田市新屋ガラス工房所属の作家である長谷部陽子さん。同工房で5月に開いた展示会「あわい」では、「間(あわい)」をテーマに「昼と夜の間、夏と冬の間など空間や時間、温度を感じさせるような色彩」をガラスの器で表現した。「間」は「人と人とのあいだ柄、関係」も意味する一字。作り手である私と、使う方を『つなぐ』という意味も込めた」と話す。

日常で使いたいガラス作品とは。どんなシチュエーションで使われるのか。使う人はどんなものや色を好むのか。制作の際には使い手側の目線に立つてさまざまな想像を巡らせる。ストーリーを思い描いて作品のイメージを膨らませていく。「例えば、頑張った一日の終わりにちよっといのお酒を飲む。好きな音楽を聞きながらゆっくりお酒を飲んだ誰かの特別な時間を彩る1点を作りたい」

大館市出身。秋田公立美術工芸短期大学(現秋田公立美術大学)でガラス工芸を学び、卒業後は青

森県深浦町へ。同町のリゾート施設内の工房で20年間活動してきた。2年前から現職となって秋田市に、現在は単身赴任中。海に輝く夕日の絶景で知られる深浦の景色や、秋田・青森で感じる季節の移ろいや空気感、文化など、日常で心引かれたものや作家としての経験の積み重ねが多彩な作品のアイデアの源になっているという。さらに、吹きガラス、キルンワーク、バーナーワークなど用いる技法も幅広く、作品ごとにモチーフや色、デザインをがらりと変える。「前職ではプロダクトデザイナーが中心だったが、現在は作家としての自分の表現を磨ける環境。青森時代の作品も大事に作り続けながら秋田での制作を楽しんでいる。手に取る方に気に入られ、長く使ってもらえる作品を残したい」と話す。



日常の特別なひとときを



「帳(とぼり)」シリーズから
「あわい」

私のギャラリー
My gallery.

YOKO HASEBE

ガラスの器